『狂人でも金を拂ふから、食はせれば好いぢやないか』と俺は言つた。

つぶこぶ言つてゐたが遂々巡査でも來たのか、最後に拵へて呉れた。

俺は停車場へ引き返して直ぐ又乘つた。

乘る時にも乘つてからも少しばかり俺は人間共に對して失禮したかも知れない。

何の事だか今考へても解らんが、俺は大津で巡査に後ろ手にくゝられて、驛から近所の交番まで連れて行かれた。

大津に下車する意志は俺には毛頭なかつた。

それに血の氣が薄くなつてゐたので、俺は無暗に抵抗も反抗もしなかつた。

交番の窓硝子の外へ、見物人が多勢押し掛けると、巡査が、見せ物ではないから其處へ立つなと追つ拂つてゐた。

日の暮になつて了つた。

巡査は二三人居るが何にも別に調べようとはしない。

此の前やつぱり社會主義者の尾行で京都まで歩るいて行つたとか、一人の巡査は話したりした。